

令和4年度



発行責任者 県中学校教研究会美術専門部長

浅野 太平

事務局 福島市笹谷島原2

福島市立信陵中学校

國島 篤

福島県中学校教育研究会美術専門部

部長あいさつ

県中教研美術専門部長 福島市立福島第四中学校 浅野 太平

3年前、北会津支部の会員の皆様から、県中教研のあり方について強い要望をいただきました。それは、行事の精選を行うことにより、各支部会員の負担軽減を求めるものでした。会員数の減少により、会津の中心である北会津支部でも会員数は一桁を大きく下回り、校務との両立が難しい状況に落ちいていたのです。県中教研の改革が望めないのであれば、北会津会員全員の退会も辞さない構えでありました。誤解のないよう申し添えますが、中教研を時代に即した形に改革しなければ、主体的に参加している自分たちの思いを本会に反映できなくなるとの危機からのご意見だったのです。今年度は、その会津地区で県研究協議会が開催されました。県北・相双大会がコロナ禍により、中止・書面開催と2年間の足踏みをした後でしたが、オンラインの活用により、会津大会は見事に成功を収めました。有言実行、会津の会員の皆様の中教研に対する熱い思いを感じずにはいられない県大会となりました。

県大会授業を終えて

喜多方市立第一中学校 金澤 文利

今回の研究授業は、主題「多様な見方や感じ方を深め、心豊かに創造する力を育む造形活動」を「郷土資料を活用し、共感できるまじりの中で探究心を身に付け協働活動できるか」という視点でとらえ実施した。生徒たちは会津型の構成・色・物語性などのデザインをグループ内で検討・確認し合い、さらに制作過程での失敗をプラス方向に生かすためにアイデア交換も活発に行われ、常にグループで対話しながら制作に取り組んだ。生徒たちは意識していなかったようだが、私が注目したのはリーダーではなくファシリテーターとして活躍した生徒がいたことだ。検討・改善を繰り返す協働制作の中で、「今ある考え方や表現をより良くしよう」とグループ内の意見の調整役をこなす生徒。特に美術の表現技能に優れた生徒ではなかったが、グループ内の個々の意見を肯定的に受け止め、次のデザインへ繋いだ。ファシリテーターは創造の場を生み出すためには大切な役割だ。どうやら生徒の力を伸ばし高めるのは教員の力だけではない。ひとりの生徒の喜びが共感をもって仲間の喜びにも変わる。学校はそんな「場」なのだ。そして学校のバックヤードには「人・地域・時代・歴史・環境」がある。教員はそこに支えられ、心が震えるような授業が生まれるのだと思う。拙い研究授業ではあったが、生徒たちの小さな気づきと小さな探究心が、小さな意識改革を起こす場、美術室になったと思う。

令和4年度 県中教研美術専門部組織

美術部専門部役員

部 長	浅 野 太 平	福 島 四 中
副 部 長	横 田 勝 秋	郡 山 四 中
	古 川 雅 秀	北 会 津 中
	西 田 英 実	草 野 中

事務局

総 務	近 藤 憲 人	蓬 萊 中
	國 島 篤	信 陵 中
庶 務	岡 崎 裕 邦	吾 妻 中
	丹 野 淳 美	川 俣 中
会 計	佐 藤 純 子	信 夫 中

常任研究員・編集委員

福 島	廣 川 豪	附 属 中
伊 達	中 島 洋 幸	伊 達 中
伊 達	玉 上 英 美	釀 芳 中
郡 山	大 橋 宏 記	行 健 中
郡 山	渡 部 信 幸	郡 山 一 中
郡 山	木 村 麗 子	緑 が 丘 中
東西しらかわ	田 上 陽 子	西 郷 一 中
い わ き	吉 野 晃 一	ふたば未来学園
郡 山	馬 場 朝 子	大 槻 中
岩 瀬	小 西 吾 郎	須賀川二中

美術専門部各支部長

福 島	浅 野 太 平	福 島 四 中
伊 達	中 田 幸 司	桃 陵 中
安 達	武 藤 淳	本 宮 一 中
郡 山	横 田 勝 秋	郡 山 四 中
岩 瀬	遠 藤 彰	須賀川二中
石 川	山 口 功 二	石 川 中
田 村	渡 辺 和 也	三 春 中
東西しらかわ	相 馬 慶 二	鮫 川 中
北 会 津	古 川 雅 秀	北 会 津 中
耶 麻	佐 藤 芳 文	喜多方一中
両 沼	野 口 幸 哉	金 山 中
南 会 津	上 野 一 幸	檜 枝 岐 中
相 馬	大 越 司	原 町 三 中
双 葉	大 沼 俊 之	双 葉 中
い わ き	西 田 英 実	草 野 中

福島県生徒造形作品研究会 および秀作審査会に参加して

二本松市立安達中学校 伊藤 修

今回、10回目の本審査会及び研究会への参加となりました。毎回のことですが、素晴らしい生徒作品や指導された先生方と出会える貴重な一日だったと感じております。参加させていただいたことに感謝いたします。

さて、今回の審査会で感じたこと、受け取ったことを二つ挙げてみたいと思います。

一つ目は平面作品における作風です。絵の分野では、アニメーション文化が影響したと思われる「眼」の描き方や主題の多様性、デザインの分野においては、技法の工夫や発想の豊かさが際立っていたことです。これは、指導者の創意工夫もあると思われますが、現代特有のメディアの影響が大きいと思いました。描く手段。このことについては、ポジティブに捉えて良いかと思います。

二つ目は、研究主題について議論を重ね、設定されてこられた先輩の先生方の存在は勿論、若い先生方の活躍です。会場で、私が質問や意見をしたら後に、若い世代の先生が、真剣な眼で私にその理由について話してこられました。諸先輩方の学びと、将来の「美術教育」への希望をこの会で感じ取ることができたからこそ、美術教員として「美術」の重要性を語り合えたのだと思います。

近年、美術の授業にも ICT の活用が求められています。タブレットの導入による弊害もあると思いますが、一方で、それに救われた子どもたちも多くいたと思います。今後その「手段」や「活用」を研究主題や副題に盛り込んでいくべきではないでしょうか。

<メディウム版画とメゾチントの作品>



立体の部 審査を終えて (立体の部審査担当)

福島大学附属中学校 廣川 豪

立体の部審査担当をさせていただき、数多くの個性的な作品たちを俯瞰的な視点で眺めるよい機会となりました。

彫刻分野で印象的であったのは、比較的大きめの作品に取り組んでいた学校が見られたことです。保管場所の確保が難しい等の理由から、大きめの作品制作は敬遠されがちですが、大きいからこそ表現できるダイナミックさや手応えがあると思います。見通しをもって制作を進める力、全体を把握しまとめる力等の育成も期待できます。

工芸分野では、細部までこだわった作品が多く見られました。外に広がっていく表現というよりは、制作者である生徒自身が作品の内部にどんどん吸い込まれていくような感覚で制作に向かっているのだろうと想像します。おそらく本人しか気づかないであろう1mm単位のこだわりに、生徒の熱い想いが詰まっているように感じました。

昨今の社会情勢に合わせて、教育現場でも ICT の積極的な活用が叫ばれています。一方で、コロナ禍の影響で、自分の手と素材が直に触れ合い、材料の質感や重さ、温度などを体感しながらじっくりと作品を仕上げていく体験は、ますます貴重な機会となるのではないのでしょうか。

機械による大量生産とは異なる「手仕事のよさ」は、物を大切に扱うことを美德としてきた日本人の精神を受け継ぐ上でも重要な考え方だと思います。手仕事によって生み出された唯一無二の作品を愛で、愛着をもって制作に取り組む子どもたちが増えることを期待します。

平面の部 審査を終えて (平面の部審査担当)

須賀川市立第二中学校 小西 吾郎

県造形作品審査会では、生徒作品自体の出来不出来より、指導者の授業構想・意図に対して、生徒がどう関わりどう表現したか、という視点を大切にしたい。

版画領域ではメディウム版画が多かった。プレス機を使わず凹版表現できることは画期的である。主題追求も想像的なものや写実的なものなど多様な広がりがあった。またメゾチントなど本格的な版画作品も見られた。指導者からは版画指導の細かい工夫などが聞かれ、指導の工夫によっては挑戦させたい領域である。

絵画領域では、3年生は自画像が多い。自分とイメージを組み合わせるのが主流である。がんばって描いている作品が多い。一方で想像的なイメージが定型となっていないか疑問もある。自画像ではないが、型にはまらない表現の作品があり話題となった。独創的な発想に到るまで生徒とのやりとりを繰り返して、表現に追い込んでいくという話である。教師は意欲を持続させつつ、良い意味で自分の殻を破る表現を促したい。

デザイン領域では、ポスターは本当に少なくなった。構成デザインやパッケージデザイン、絵画との中間的表現を狙った作品など、多様性が見られた。

総合領域では、作家について調べ、1枚のレポートにまとめる作品が出された。鑑賞授業の成果を造形審査会で見ることが少ないが、総合領域の中で、各学校の鑑賞の取り組みを知りたいものである。



令和5年度の研究について

美術部総務 福島市立蓬萊中学校 近藤 憲 人

1 研究主題

「多様な見方や感じ方を深め、心豊かに創造する力を育む造形活動はどうすればよいか。」

- 令和4年度副主題
「造形的スキルを身に付けさせる工夫」
- 令和5年度副主題
「多様な価値観を育む指導の工夫」
- 令和6年度副主題
「美術の広がり」と自己実現」

2 これまでの研究経過

研究主題「多様な見方や感じ方を深め、心豊かに創造する力を育む造形活動はどうすればよいか。」では、「感性」を磨き働くものにしていくことを主眼に置いた。造形活動を通して、よりよい社会と幸福な人生を創っていくことにつながぐために、美術のよさや強みを、指導する教師がしっかりととらえ、研究が進められた。

1年次の副主題「造形的スキルを身に付けさせる工夫」では、技法等の体験だけにとどまらず、経験によって身に付いた「造形的スキル」に高める工夫や、生徒一人一人が自分の思いを表出する手法、必要な情報を取り入れる ICT 活用を含めた工夫など、各支部において題材の工夫・深化への取り組みが進められた。

オンラインで行われた県大会では、地元の伝統文様である会津型を用いたステンシルによる共同制作の授業が喜多方第一中学校から提供され、造形的スキルの明確化やデザイン思考の重要性が確認された。また、県中学校生徒造形作品研究会及び秀作審査会では、テーマ性の高い立体作品や、表現技法を駆使した平面作品などが出品され、生徒一人一人のもつ自身の個性や価値観を明確にさせるとともに、自他の作品などに表れている創造性を尊重する態度の形成を図ろうとする先生方の取り組みが伝わってきた。

3 令和5年度の研究の内容と方法

令和5年度は、副主題「多様な価値観を育む指導の工夫」のもと、「多様な価値観」に焦点を当て、学ぶ楽しさや意義を実感させ、自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながるという意識などをこれまで以上に高め、多様性を力に変える取り組みを工夫したい。

多種多様な価値観の表出方法を知り、アカデミックな価値観から最新の情報までを幅広く生徒に伝えていくことが、これからの社会を生きる子どもたちに生きて

働く力を身に付けさせるために重要である。

日々の小さな「自己成長の喜び」の積み重ねを大切に、他人も自己も尊重できる精神を育み、自己の内面的な向上と社会への発信や奉仕ができるようになることが望まれる。そのためには、長期的な題材のみではなく、短期間で完成できる題材や、本制作に入る前の試作的な題材などの工夫、およびそれらの指導過程における鑑賞や協議についての指導方法の工夫を図りたい。

(1) 研究内容

- ① 多様な価値観を味わえる題材の工夫について
- ② 生徒の価値観を広げる鑑賞について
- ③ 表したい内容を明確にして表現させる手立てについて
- ④ 価値の多様性を認め合う活動の工夫について
- ⑤ 生徒の変容の把握と評価の工夫について

(2) 研究方法

- ① 指導計画（毎時・年間）の見直しと再構成
- ② 鑑賞活動・言語活動の工夫
- ③ 様々な実践事例の収集・分析
- ④ 美術ゼミ等研修や美術教師同士の情報交換
- ⑤ 生徒の活動の記録方法の工夫・蓄積

4 参考資料

- 中学校学習指導要領 (文部科学省)
- 中学校学習指導要領解説美術編 (文部科学省)

令和5年度中教研美術部事業計画(案)

実施時期	事業（会議名等）	場所等
4月	各支部専門部総会	各支部
5月中旬	県中教研支部専門長会 及び主題研修	福島市
5月下旬	県主題研修報告会	各支部
7月下旬	支部研究協議会	各支部
8月4日(金)	美術ゼミナール	郡山市
10月上旬	県研究協議会いわき大会	いわき市
10月下旬	県研究協議会報告会	各支部
11月下旬まで	地区造形作品審査会	各支部
12月1日(金)	県造形作品研究・審査会	郡山市
1月～2月	支部専門部長会	郡山市
2月末日まで	部報発行	福島市